

言語接触による言語変容の諸問題について¹⁾ ——ウイグル語の統語法研究の可能性——

栗林 裕*

1. はじめに

言語と言語が接触することにより生まれる言語変化にはどのようなものがありうるのか、近年我が国のチュルク諸語研究の中から指摘されてきた諸問題および日本語の研究成果より得られた知見を総合しつつ、現状を展望し、特にウイグル語の研究の可能性を探りたい。ウイグル語（新ウイグル語、現代ウイグル語）とは中央アジアのタリム盆地に居住するトルコ系民族の言語で、人口は1千万人弱である。大多数のウイグル人は中国の少数民族として維吾爾族と呼ばれており、イスラム教徒である。また、カザフスタンやキルギスタン、ウズベキスタンなどにも少数が居住する。

本稿ではウイグル語の主に統語的および形態的諸問題に重点をおくことにし、音韻的变化については扱わない。

2. 行為者名詞の表示形態について

日本語では行為者を表示する手段として「～に」、「～によって」、「～で」などの後置詞的あるいは格助詞的手段がもちいられる。本来、外国語からの翻訳の影響で発達したといわれるこの現象は、出現環境が限られており、日本語学の中では黒田（1985）、久野（1986）をはじめ、様々な議論がある。

行為者句の表示に関する制限は、実は日本語だけでなくトルコ語にも見られ、また近年ではキルギス語（cf. 大崎2003）やウイグル語にも同様の制限が見られるとの指摘がある。たとえば「～によって」に相当する後置詞はウイグル語では *täripidin*、トルコ語では *tarafından* によって表されるが、この表現は両言語とも文語的な表現に使われることが多く、実際の出現頻度はそれほど多くないという共通点がある。

- (1) Muällim Äli-ni mahti-di.
先生 アリ-対格 ほめる-過去
 ‘先生はアリをほめた。’

* 岡山大学文学部助教授

(2) Äli muällim täripidin mahta-l-di.

アリ 先生 によって ほめる-受動-過去

‘アリは先生にほめられた。’

ミリカダム (2004)

ウイグル語では後置詞 *täripidin* の他に後置詞では *bilän*、*arqiliq*、さらには与格、奪格、位置格などが行為者表示として用いられる (cf. ミリカダム2004)。

これらの現象を単に翻訳の際にみられる文体的な現象と捉えるのか、それとも日本語を含めたチュルク諸語に行為者標示に関する制限が存在するのは単に偶然の一致によるものか明らかではない。さらに、ウイグル語では位置格で行為者名詞を表示する点はトルコ語には存在しないなど、行為者標示の周辺的な形式ではバリエーションも認められる。

これとの関連で翻訳の際にみられる言語変容について付言したい。Johanson (2002) では従来の借用現象を全体的複写 (global copying) と選択的複写 (selective copying) に2分割し、前者は借用される形態そのものがそのまま取り入れられるのに対し、後者では借用される構造の特質が取り入れられるとする。選択的複写の数ある特質の中で「頻度」という項目をかかげており、それも複写 (借用) の対象になるとする。例えば接続詞や照応表現などの使用が選択的複写をされる「頻度」の具体例となる。社会的に支配的な言語の接続詞の「頻度」が社会的に被支配的になる言語に取り入れられ、結局は類推による強化なのであるが、社会的に被支配的な言語の接続詞の使用頻度が高まるといった具合である (cf. Johanson 2002)。ウイグル語のコンテクストに当てはめると、印欧語系の外国語からの翻訳により行為者の標示の明示という要請が言語内の高まってきた。元来、行為者を非明示的にするのが優勢であったチュルク系言語は、社会的に支配的な言語からの行為者標示の形態に関する「頻度」という特質を複写したといえる (ウイグル語が社会的に被支配的で、英語が支配的であるとは現時点では考えることができないが、翻訳の状況では擬似的にそういう状況が作り出されているのであろう)。その結果、チュルク系言語全体に翻訳という状況を通して行為者表示が広まったのである。Johanson (2002:128) ではフランス語やロシア語の構文パターンがチュルク諸語の従属節システムに複写された結果、チュルク語の本来的な連結動詞による構造が衰退したとしているが、同様の現象が行為者標示の形態にも生じていると考えられる。

3. 受身の意味を持つ使役形

次に見る興味深い現象は、形態的に使役構文をとるが、意味的に受身の解釈がでる構文の存在である (cf. ビョケソイ 2000)。この現象は広くチュルク諸語で観察されるが、興味深いことに中央アジアのカザフ語やキルギス語ではかなり広範囲にみられるのに対し (cf. 大崎2004)、西の端のトルコ語では特定の構文にしか認められない。次の例はトルコ語からのものである。

- (3) Ben para-m-ı çal-dir-di-m.
私 金-1所-対格 盗む-使役-過去-1単
‘私はお金を盗まれた。’

使役構文では一般的に主語である使役者が行為者の意味解釈を受ける。しかし(3)では述語に形態的に使役接辞がついているにもかかわらず、主語である「私」はお金を盗まれた主体になり、被動作者の意味解釈を受ける。同様の構文はウイグル語にも存在する。

- (4) Pul-um-ni oğri-ğa oğrili-t-ip qoy-du-m.
お金-1単所-対格 泥棒-与格 盗む-使役-連用形 てしまう-過去-1単
直訳：私は私のお金を泥棒に盗ませた。
意識：私は私のお金を泥棒に盗まれた。 ミリカダム (2004)

このような受身を表す使役構文は普遍的な現象であるようにも考えられ、Washio (1993) は語彙意味論の枠組みを援用することで説明しようとしている。しかし、なぜ同じチュルク系の言語の中で構文の成立に関してバリエーションが見られるのかという点はさらに追求されるべき問題であると思う。興味深いのは次のようにウイグル語でも所有者-所有物関係が構文内で成立しており、これは日本語の間接受身の一分類である持ち主の受身を想起させる。

- (5) Ağri-ğan çiş-im-ni dohtur-ğa tart-quz-du-m.
痛む-連体形 歯-1単所-対格 医者-与格 抜く-使役-過去-1単
直訳：私は痛んだ歯を医者にぬかせた。
意味：私は痛んだ歯を医者にぬいてもらった。

- (6) Čeç-im-ni öy-dä aka-m-ğa al-dur-du-m.
髪-1単所-対格 家-位置格 兄-1単所-与格 とる-使役-過去-1単
直訳：私は家で兄に散髪させた。
意味：私は家で兄に散髪してもらった。 ミリカダム (2004)

上例での「私」と「歯」の関係および「私」と「髪の毛」の関係は身体部位という非分離所有であるので所有者-所有物の意味的關係が成立している。日本語における間接受身の場合と同様に出来事と経験者の間にはある種の関係が成立しているといえる。ウイグル語では、この関係なくしては、使役で受身の意味は表せないようである。

この構文に関連して、トルコ語では使役の使用域が日本語よりも広いと考えられる例がある。

- (7) Siz saç-ınız-ı kes-tir-di-niz mi?
 あなた 髪の毛-2 複数-対格 切る-使役-過去-2 複数 疑問
 ‘あなたは髪の毛を切りましたか?’
 ‘*あなたは髪の毛を切らせましたか?’

日本語の対訳を見ればわかるように、日本語では通常使役の形は対応しない。主語である「あなた」と「髪の毛」は非分離所有の関係にあるので、受動の意味を表す使役形であるように見える。日本語を学習するトルコ語話者（日本語学科の大学4年次生対象）に対する筆者の予備調査（2004年12月 トルコ・チャナッカレ3月18日大学にて実施）によると、ほとんどの学習者にとって、上記例文が受身の意味をもつことは理解できるようで「髪の毛を切ってもらいました。」と「～てもらおう」構文で日本語で表現することは出来る。つまり主語が被動作者になり受身的な意味が対応するという事は認識できている。しかしトルコ語では文中に所有関係が全くない場合でも使役形を使う場合がある。次の例は旅行会社の窓口で旅行者が予約を入れたい時、窓口の係員に対する発言である。

- (8) Ben rezervasyon yap-tır-mak isti-yor-um.
 私 予約 する-使役-不定 欲しい-進行-1 単
 ‘*私は予約してもらいたい。’
 ‘*私は予約させたい。’
 ‘私は予約をお願いしたい。’

ここでは、使役形が直接行為を行う人（窓口の係員）に対して用いられている。日本語ではこのような使役形態をもつ用法は認められない。受身の意味を持つ使役形を考察するためには使役自体の用法の相違についてさらに検討する余地がある。

4. 関係節構造

次の問題は、関係節構造の形成において、いわゆる内の関係と外の関係と呼ばれる現象があり（cf. 寺村1993）、中央アジアのチュルク諸語では、日本語同様に内の関係も外の関係も成立するという点である。内の関係とは名詞が元の文の中で関係が持てるような場合のことで、外の関係とは名詞と修飾部の中に元の構造を復元することが出来ない場合であり、同格節とも呼ばれる。

- (9) a. 魚焼く男
b. 魚を焼く匂い

(9a) 文からは元の文である「男が魚を焼く」を復元することが出来るが、(9b) 文からは元の文を復元することは不可能である。

Fujiie (2000) はこの点に関してカザフ語の例をあげて、カザフ語では外の関係が成立するが、西にあるトルコ語では外の関係の成立が難しいという点を論じている。例えばトルコ語では日本語で可能な「魚の焼ける匂い」のような関係節構造をそのままの形で表現することが出来ない。

- (10) a. *Balı ğ -ın piş-tiğ -i koku-su.
魚-属格 調理する-連体形-3 単所 匂い-3 単所
- b. *Balı ğ -ın piş-en koku-su.
魚-属格 調理する-連体形 匂い-3 単所
'魚の焼ける匂い'

正しい形は、複合名詞を使用した統語構造にする必要がある。

- (11) Piş-en balık koku-su.
調理する-連体形 魚 匂い-3 単所
'焼ける魚の匂い'

上例では「魚匂い」という名詞句が形成されており、「匂い」に直接修飾関係があるような構造ではないので、元の文に忠実な表現とは言いがたい。この表現もまた西に行くほど成立条件が厳しくなるという傾向はあるようである。しかしながら Fujiie に反して、まったく不可能というわけではないようで、類似構文はトルコ語でも見られる。

- (12) Sen-i sev-diğ -im duygu-su değ-iş-me-yecek.
あなた-対格 愛する-連体形-1所 気持ち-3 単所 変わる-否定-未来
'あなたを愛する気持ちは変わらない。' ギュロル p. c.

トルコ語で(10)のような構造が許されないのは、連体形の構造的な制限によるものである。トル

コ語学の伝統的な用語による連体形 (Ortaç) では不明確であるが、トルコ語の理論言語学的研究の伝統では連体形を主語分詞形 (subject participle) および目的語分詞形 (object participle) と呼んでいるが (cf. Kornfilt 1997)、これは当該名詞の元の文による文法関係に基づくものである。定義上、元の文と関係を持たない文を、いくらこれらの連体形 (トルコ語では Ortaç) で接続させても非文法的になるのは当然なのである。例文(12)は連体形である -yecek は主語分詞あるいは目的語分詞というような役割関係に対して中立であるために文法的になるのである。しかし外の関係を表現するためには日本語のように節での修飾がされにくく、複合名詞を形成し統語法を変えるより他に方法がないという傾向は見られる。つまり「魚の焼ける匂い」という表現は、日本語と語順が同じであるにもかかわらずトルコ語ではなぜ「焼ける魚の匂い」としか表現することが出来ないのかは問題として残る。

5. 関係付け

ここまで見てきた限りでは、西に行くほど成立が困難な構文と、東に行くほど成立が容易になる構文があるように見受けられる。このような傾向は何に起因するものであろうか？本稿では、これらは関係付けという概念が重要な役割を果たしている可能性があることを指摘したい。つまり、3節でみた受身の意味をあらわす使役構文と4節で見た外の関係の成立条件は相関しているのである。

大雑把な言い方をすれば、東のほうのチュルク系言語は構文にみられる名詞間の関係付けが相対的に容易に成立するが、西のほうのチュルク系言語は名詞間の関係付けが相対的に困難であるということである。したがって、この現象は(13)のような、いわゆる多重主語構文の成立にも関連してくる。チュルク諸語のように、主語と述語の間で厳密な一致が見られる言語は一般的に、多重主語構文を許さないとされている。これは、文法的に一致なくしては名詞の間の関係付けを成立させることが出来ないからである。関係節における外の関係を許さない傾向が強いトルコ語はまさにこのような傾向を具現しているといえる。

(13) 象は／が鼻が長い

トルコ語ではこの例文をそのまま直訳することが出来ないので、以下のように属格と所属人称接辞による修飾語－被修飾語の枠構造を形成しなければならない。つまり、文法的に一致による関係付けが義務的になるのである。(14)の例は名詞句内で身体部位に関する所有関係に基づく一致を形成している。

- (14) Fil-in burn-u uzun-dur.
 象-属格 鼻-3単所 長い-確定
 ‘象の鼻は長い。’

あるいは次例のように迂言的な表現にしなければならない。

- (15) Fil burn-u uzun bir hayvan-dir
 象 鼻-3単所 長い 1つ 動物-確定
 ‘象は鼻が長い動物である。’ オズベッキ p.c.

関係節の外の関係による連体修飾構造も上記の現象と無関係ではない。

- (16) a. *Bah ğ-in piş-tiğ-i koku-su.
 魚-属格 調理する-連体形-3単所 匂い-3単所
 b. *Bah ğ-in piş-en koku-su.
 魚-属格 調理する-連体形 匂い-3単所
 ‘魚の焼ける匂い。’

多重主語構文で見られたように、トルコ語では名詞間の関係付けは原則として所属人称接辞によらなくてはならない。(16)は「匂い」と「魚が焼ける」との関係付けがトルコ語話者にとって非常に困難であることを示している。主題化による名詞間の関係付けが非常に容易になされる日本語話者にとって、「魚が焼ける」と「匂い」の関係付けは容易なものである。日本語はまた主題を示す標示「は」があるのに対して、トルコ語では特別の形態的な形式を持たず、音韻的な休止で示されるのみである。このような形式的なストラテジーの有無が関係付けが出来るか出来ないかに関連しているのである。したがって次のような修飾部と主名詞(被修飾部)の関係付けの類型が不明なものと同分類される外の関係を持つ連体修飾節(cf. 寺村1993)も当然のことながらトルコ語ではそのままの形で成立しない。

- (17) a. 頭のよくなる本 寺村(1993)
 b. 絶対受かる家庭教師

カザフ語もキルギス語もウイグル語も人称接辞による所属を表す形式を持つ言語である。しか

し、形式上使役で意味上受身を表す構文が広範囲に見れることや、外の関係の連体修飾を許す点は、トルコ語よりもより関係付けが緩やかであるように見受けられる。これに対して西の端のトルコ語は関係を文法化する方向に進んだ。このことが結果的に主語分詞や目的語分詞といった文法関係に厳密な連体形の発達を促したのであろう。また第3節では使役形で受身の意味を表すには出来事と経験者の意味役割の間での関係付けが必要になることを見たが、このような関連付けが各種構文の成立条件に関わる可能性がある。このような点を考慮すると、カザフ語よりもさらに東に位置するウイグル語の詳細な検証は必要である。

6. おわりに

今後、ウイグル語の考察を進めるに当たって、以下の点に留意すべきであると考える。

1. チュルク諸語の間で主題化に対する文法化の違いが見られるのかどうか。
2. 主題化を示す個別の現象はどのようなものがあるのか。特にチュルク諸語に特有のものは見られるのかどうか。
3. 主題化に関連する統語現象はどのようなものがあるのか。
4. チュルク諸語間のバリエーションの存在はいかなる要因によるものか。統一的な関係付けの概念を設定し、その概念の強弱による説明の可能性を探る。

以上、本稿では前半部で翻訳という観点から複写の問題を扱う可能性を探り、後半部では特定構文の分布から統一的な枠組みが設定できるのかということを中心に考察した。言語の変容を見るためには異質の言語との共存の状況を見ると同時に、同質の言語間に見られる普遍性と個別性に注視する必要がある。これらの研究の遂行のためにチュルク諸語と構造的に類似した言語である日本語の研究、つまり日本語学の成果を生かすことが出来る。ウイグル語と他のトルコ系民族の諸言語および接触諸言語の対照研究をすることで言語の観点から民族の共生に関わる諸問題を明らかにしていきたい。

- 1) 本稿の例文のウイグル語については母語話者であるスレイヤー・ミリカダム氏（ウルムチ出身）およびトルコ語については母語話者であるアブドラフマン・ギュロル氏（アンカラ出身）、アイドゥン オズベッキ氏（アンカラ出身）の協力を得た。

参考文献

Balpinar, Zulal (1981) *Turkish Passives : Morphosemantic and Syntactic Considerations*. University of Florida. Doctoral Dissertation.

Fujiie, Hiroaki (2000) Kazak Türkçesinde Ortaç ile Yapılan Ad Tamlamaları. 第7回国際チュルク学大会 予稿

Johanson, Lars. (2002) *Structural Factors in Turkic Language Contacts*. Curzon.

Kornfilt, Jaklin. (1997) *Turkish*. Routledge.

Washio, Ryuichi. (1993) When causative mean passive: a cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 2, 45-90.

黒田成幸(1985)「受身についての久野説を解釈する」日本語学4, 69-76.

久野 暉(1986)「受身文の意味」日本語学5, 70-87.

大崎紀子(2003)「キルギス語の受動文にみられる複数の動作主マーカーについて」日本言語学会 第126回
大会予稿集

大崎紀子(2004)「キルギス語において使役が受動の意味をもつとき」『京都大学言語学研究』第23号
京都大学

寺村秀夫(1993)『寺村秀夫論文集Ⅱ 言語学・日本語教育編』くろしお出版

ビョケソイ・デニズ(2000)「日本語とトルコ語の受動文について」『筑波応用言語学研究7』85-98
筑波大学

ミリカダム・スレイヤー(2004)『ウイグル語のヴォイスについて-受動態を中心に-』修士論文
岡山大学大学院文学研究科

略記号

1 単=一人称単数人称接辞

1 単所=一人称単数所属人称接辞

2 複=二人称複数人称接辞

2 複所=二人称複数所属人称接辞

3 単所=三人称単数所属人称接辞